

# 子どもは音をいかに音楽するのか

著者	横井 志保, 五十嵐 睦美
雑誌名	名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇
巻	54
号	1
ページ	15-22
発行年	2017-07-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000942">http://doi.org/10.15012/00000942</a>

〔論文〕

## 子どもは音をいかに音楽するのか

横 井 志 保・五十嵐 睦 美

名古屋学院大学/函館短期大学

### 要 旨

領域「表現」となって四半世紀以上過ぎたが、未だに表現の指導は子どもの表現を受け入れ見守ることだと信じている保育者が少なくない。そこで本研究では、子どもが音具に向かい、音を鳴らし試して、そこからどのように音楽するのか、また、その音楽する過程において何が起きているのか、保育者の適切な援助とは何かを明らかにすることを目的に実験的な実践を行った。その結果子どもが表現を受け取ることが音楽する第一歩となり、音楽しているように見える行為も音の探索に留まり、音具を共有していても、音の探索行動中は子ども同士が関係し合うことはない。また、子どもと共に音楽する保育者が子どもの音楽フレームを理解することが子どもの表現を支える上で重要であることが示唆された。

**キーワード：**たたく表現活動、音、音楽する、実験的実践、4歳児

## How children make sounds into music

Shiho YOKOI, Mutsumi IGARASHI

Nagoya Gakuin University/Hakodate Junior College

---

発行日 2017年7月31日

## はじめに

人は音の出るモノがあると、それを鳴らしたくなる。ましてや子どもは、音の出るモノを手にする  
とたちまちそれを鳴らす。1990年施行の幼稚園教育要領の領域が6領域から5領域となり「音楽リズ  
ム」から「表現」となって四半世紀以上経った。そこに‘音楽’の言葉が無くなったことで、いまだ  
に保育現場では何か教えることは悪いことで、表現するための環境を整えて‘見守る’ことが子ども  
のためであると信じている保育者もいる。井口<sup>1)</sup>は「自由で自発的な活動を望むことは、そこへ開花  
する種を蒔くことや手入れをおろそかにしては実現しないということを強調したい」と述べ、保育者  
が子どもの内的な課題の読み取りと形成的評価観による指導が必要であるとしている。

音の出るモノを鳴らすという子どもの探索行動は短時間であり、音を試し、満足できたところでそ  
れらは終わる。しかし、子どもの中には音を試しながら音楽する姿も見ることができる。これまで表  
現のための環境に関する研究<sup>2)3)</sup>はなされているが、実践において表現そのものに着目した研究は筆  
者が行ってきた研究<sup>4)5)6)</sup>の他にはほとんど見当たらない。

本研究は、子どもが音を鳴らして試し、そこからどのように音楽するのか、また、その音楽する過  
程において何が起きているのか、保育者の適切な援助とは何かを明らかにすることを目的とする。

## 方法

筆者らが実験的な実践を行い、その経過を録画資料とし分析した。

対 象：愛知県内市立幼稚園 年中4歳児 2クラス

実 施 日：2016年2月15日

実践の概要：筆者（実践者Y）が中心となり子どもに働きかけ、時に表現を支えた。また、担任教師  
も活動に加わった。音を鳴らす表現活動の前には、共同研究者（もう一人の実践者I）のピアノ伴奏  
で子どもたちの好きな歌を歌ったり、鈴付きの大きなループを皆で持って音楽に合わせて歩いたり  
走ったりした。その後、子どもの身近にあるモノ（オケ太鼓、ごみ箱、空のペットボトル、以下音具  
と呼ぶ）を使って音を鳴らした。

1. 音具を使って好きに音を鳴らす
2. 好きな音具を持ち、一人ずつこちらの問いに鳴らして応える（コールアンドレスポンス）
3. 子ども同士で音のやりとり（会話）

音の探索やりズムを作りだす過程において、子どもが何を見つけ面白がるのか。また、大人とのや  
りとり、子ども同士のやりとりの中で子どもの何を引き出すことができるのかを探った。

## 結果と考察

### 1. 音が音楽になる条件とは

モノとモノを打ち合わせたり、こすったりすると音が鳴る。しかし、それだけでは音楽にはならな

い。子どもが音楽するとは、どのような条件が必要となるのか。以下に事例を挙げ考察したい。

### 事例1《音のやりとりにならなかった交互打ち》

子どもそれぞれが、好きな音具を手にして好きに鳴らした後、男女児1名ずつが皆の前に出て音を鳴らし合った。男児はプラスチック製のごみ箱とペットボトルを使用し、女兒はアルミ製のごみ箱とペットボトルを使用した。二人の前にはテーブルが置いてあったことから、時にテーブルもたたいて鳴らした。

男児、女兒どちらも‘トトトン’と交互に短く鳴らした。どちらも鳴らす度にたたく場所を替えており、ごみ箱の側面、内側、テーブルと、次々にたたく場所を移動させて鳴らした。二人はお互いを見合い、交互に順に鳴らす、タイミングは一定で単調であった。途中、女兒がペットボトルの飲み口の硬い部分でたたくことで、それまでの音との違いに気付き笑顔になったが、男児には変化は伝わらず、それまでと同じ様な交互打ちは続いた。

変化を付け、音楽的なやりとりになるようにと、実践者Yがオケ太鼓でリズムカルなリズムを打ちながら仲間に入ったが、男女児の交互打ちに変化は見られず、それまで通り続けられた。

本事例には、音を探りながら鳴らすという課題と、その音で二人でやりとりするという課題、そして即興的に短いリズムパターンを作るという3つの課題が混在していた。子どもたちはペットボトルとオケ太鼓で音を探りながらも、やりとりをしようと一生懸命考えながら音具をたたいたが、鳴らした音を相手に伝えることに意識が強く向き、相手の表現を受け取ることに意識が向けられなかった。一見すると、二人でやりとりをしているかに見えるが、このお互いの一方行へのやりとりは、順に音を鳴らしているに留まり、相手の音を受け取り、応えてはいない。そうであるから、実践者Yが音楽的なやりとりにしようと二人のやりとりに重ねるようにリズムを打ちながら仲間に入っても、聞こえていても聴いていないので、二人はYに影響されることはなかった。

二人で音を鳴らしても、相手の鳴らしている音を受け取っていないので、流れのある一つのまとまったリズム、音楽としては聞こえてこなかった。

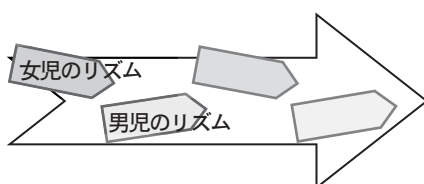


図1 2人でやりとりして1つの音楽となるイメージ

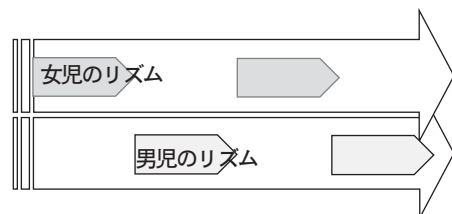


図2 事例1のイメージ

## 事例2《音楽するイメージをもって音を探る男児》

子どもたちはペットボトルに息を吹き込み音を鳴らすことから、口元の細い部分を両手に持ち、それらを互いに打ちつけて鳴らし始めた。他に、ペットボトルを片付け、横に置いてあったごみ箱に持ち替え、底を打ち鳴らしたり、オケ太鼓を肩に担いで鳴らし始めたりする子も見られた。

A男、B男、C男それぞれが、ごみ箱2つに持ち替えて少し広い場所に移動した。A男はスチール製、B男、C男はプラスチック製であった。A男は1つを床に伏せて置き、もう1つを両手に持つと、底と底を合わせて「カンカンカンカン」と打ち鳴らした。C男は床に正座し、自分が持ってきた2つのごみ箱を伏せて並べると、B男が置いたごみ箱を受け取り、自分の前に並べた。C男は、それらを両手で交互に打ち鳴らした。B男は残った1つを左腕に抱えるように持つと、底を右手で打ち鳴らした。しばらくして、C男はA男が使っていたスチール製のごみ箱が欲しくなり、眼で合図すると、それを一つ譲ってもらい、自分のプラスチック製のごみ箱の仲間に入れた。並べて叩いてみるが、床に直接置いたことで、A男が鳴らしていたような「カンカン」といった、スチール特有の音が思ったように出なかった。実践者Yがスチールのごみ箱を浮かせて置き、A男の出したい音に近づくように近くにあった布袋をゴミ箱の一部に嚙ませるように敷いたが、C男には邪魔な物とみなされ、すぐに外された。C男は近くにいた女兒たちがペットボトルをマレットにしてたたき、「カンカン」という音を出しているのを見て、ペットボトルを持ってきてマレットにして鳴らし始めた。しばらく打ち鳴らした後、後ろにいたA男のスチール製のごみ箱を振り返って打ったりしていたが、直ぐに、向きを変えてA男の使っていたオケ太鼓も自分の使っていた物と一緒に並べ、たたき始めた。A男もそれらを一緒に叩いたが、二人は各々が好きにたたいており、視線を合わせることもなく、お互いを意識することはなかった。その横では、D男がオケ太鼓とプラスチックのごみ箱2つを並べて、ペットボトルのマレットで手を交差させたりしながら乱打していた。

C男は音具の見た目からイメージする音と、たたいて鳴る実際の音とのギャップを埋めようと、様々な種類の音具を並べて音を試した。また、音のイメージだけでなく、奏法のイメージがあるC男は、両腕を交差させてマレットに見立てたペットボトルで音具を打って音探しを続けた。自分のイメージする音や奏法のイメージに近づけようと音具を増やしたり、すぐ近くの子どもと音具を共有したりして、一見、セッションしているかのようであったが、視線を合わせることもなく、お互いを意識することもなく、同じ音具を使用していたに過ぎなかった。また、実践者Yが音具を浮かせて良い音が出るようにと敷いた布袋はC男にとっては見た目の悪い邪魔者であった。C男は音を探索していたはずだが、見た目が優先であったことがわかる。C男にとっては音楽するイメージがあり、そのイメージに近づける行為が両手を交差して打つフォームや音具の並べ方、見た目の悪い布袋を外すことに繋がっている。

C男の音の探索と音楽することに集中していたが、目の前にある音具のみに集中していたわけでは

なかった。自分の出したい音を他児から見つけると、同じ音具を使用しようとしたり、奏法を真似る等して自分の周りに注意深く目と耳を働かせていたことがわかる。必要な情報を得るために、活動に集中しながらも周りから吸収しようという、C男の音楽しようとすることに對する強い思いが現れている。

### 事例3《他児とタイミングを合わせようとする女児》

部屋のあちこちで、それぞれが好きに音具を鳴らしていた。テーブルの上にオケ太鼓を伏せて置き、ペットボトルをマレットにしたたいていた女児Eは、それまで好きにたたいていた隣の女児に目をやると手を止め、「せーの！」と、大きな声を出して連打したり、短いリズムパタンを作って打ち始めた。短いが一定の時間で手を止めては「せーの！」の掛け声をかけ、隣の女児とタイミングを合わせようと数回繰り返した。終わりの掛け声は無いが、E子が手を止めると隣の女児もタイミングを合わせて止めた。

E子の音楽しようとする気持ちの現れが「せーの！」の掛け声で始まる隣の女児と一緒に打つことであった。E子の掛け声は、和太鼓風であるが、たたくりズムは違っていた。どこかに和太鼓のイメージがあるのか、E子にとって音楽するとは、音を揃えるまでには至らないが、誰かと一緒にタイミングを合わせて一斉に音を鳴らし、アンサンブルすることだということがわかる。

## 2. 音楽しようとする子どもへの適切な援助とは

実践者や保育者は子どもと共に音楽し、表現しながら援助する。この場合の援助とは、子どもが出そうとしている音や、即興で作るリズムにヒントを与えることであろう。

前述の事例2では、実践者Yがスチールの音具の下に袋を噛ませて浮かせ、C男が出そうとしている音に近づけようとするが、C男はそれをはずしてしまう。C男には、床にそのまま伏せられた音具が出す音と、そうでない音の違いがまだ理解されていなかった結果がはずすことに繋がった。一般的に考えると、子どもが出そうとしている音に近づくために行ったこの援助は、一見すると適切なようだが、C男は音楽するイメージフレームがあり、そのフレームの最も外側にあるのは「ビジュアル」であって、その内側に「サウンド」がある。そうであるから、内側が埋まらないドーナツ状のこの時に「サウンド」にかかわる援助をしても受け入れられず不適切となる。

### 事例4《音楽するフレームの子どもと保育者のズレ》

お友だちとオケ太鼓を挟んで斜めに向かい合い、床に座ってたたいていたF子。保育者もペットボトルをマレットにそこに加わっていた。それぞれが、好きにたたいていたが、保育者が「トントンントン」と、わかり易い一定のリズムパタンでたたいてみせると、即F子はそれまで

好きにたたいていたのを止めて、保育者のリズムを真似て‘トンうんトンうん’と何度かたたいた。しかし、すぐにまた元の乱打へと戻った。

音楽するフレームは、F子、保育者それぞれが持っている。これまでの音楽経験や、音楽に接してきたことによる‘音楽するとは’というイメージがそれぞれに持たれているのだ。そこで、保育者はフレーズ感や拍感が感じられず、ただ乱打しているように見えたF子に、保育者の音楽フレームで感受し、‘トンうんトンうん’という1拍打っては1拍休むという、単純でわかり易いリズムパターンを見せて。それは、保育者にとって「4歳児後半の子どもが音楽するとは、こういったリズムパターンでお友だちと一緒に打つと楽しくなる。」または、「お友だちと楽しむためには、こういったリズムパターンでなければ音を合わせる楽しみが見出せない」と、考えての援助であったのだろう。F子はそれをすぐに受け入れ試してみるが、F子がこれまで打っていた自由にリズムパタンの無い連打は、あまりにも保育者の示したものと違っており、すぐにやめてしまった。このような、違った音楽フレームで共に表現することは難しく、ここでは保育者が子どもの音楽フレームを理解し、保育者自身の音楽フレームではなく、子どもの音楽フレームに沿った援助が必要となろう。そのためには保育者は子どもの音楽する瞬間瞬間を受け止め、必要な援助を瞬時に判断する力が必要となる。

### 3. 音楽することと音を出すということ

子どもが簡単に音楽することができるよう、これまでは手でたたけば即、音の出る音具を取り上げてきた。ここでは、空のペットボトルを使用して息を吹き込み、音を鳴らすことを試みた事例を挙げて考察したい。

#### 事例5《ペットボトルによる音探し》

実践者Iがペットボトルを吹いて音が出るのを見せた後、子どもたちはそれぞれ好きにペットボトルを吹いて音を鳴らし始めた。しばらく息を吹き込んで音を出していたが、G男は置いてあるごみ箱に目をやると、その側面のギザギザとしたデコボコをギロの様に爪でこすり、実践者Iに共感を求めるように視線を合わせた。IもG男がしたのと同様にG男の持つごみ箱を鳴らしたが、すぐに他のペットボトルを吹いている子どもに目を向けた。G男はそのままゴミ箱を鳴らし続けた。

幼児にとってペットボトルに息を吹き込んで音を鳴らすことは、音に変化がつけにくい。ましてや初めて行う子どもには、息の音が「ホーホー」となるばかりで、単調になる。息遣いやペットボトルの向きで、音は変化させられるが、子どもたちはそこまでは気付くことができなかった。ペットボトルを吹いて音を出す活動は、音の種類を知ることに関わり、吹いて音を出すという方法を知ること

子どもにとって面白い活動となるが、それを持続、発展させるには、息遣いやペットボトルを扱う技術が必要となる。

本事例からもわかるように、即興的に音楽する子どもにとって、音楽しようとするイメージからなる音と、音具から出る音のマッチングは音楽する際の重要な要素となる。

## まとめ

子どもが音楽しようとする時、まずは音の探索がなされる。次に子ども一人一人がもつ音楽のイメージに近づけようと、音を鳴らすが、その音楽のイメージとはパフォーマンスであったり、音そのものであったりする。ただ、そのイメージと実際が合致しないと続かず活動を終える。

子どもが音を音楽する過程において、実践事例より以下のことが明らかになった。

1. 一見2人がやりとりしながら音具をたたいて音楽しているように見えていても、相手の表現を受け取っていないければ、音楽としては成り立たない。表現を受け取ることが音楽する第一歩となる。
2. 奏法のイメージがある子どもは、音具をいくつか並べて表現するが、たたくパフォーマンスのイメージが優先し、一見音楽しているかのように見えるが、音の探索行動に留まっている。
3. 探索行動中は、音具を共有することがあっても、その子ども同士が音楽する相手として直接関係し合わない。
4. 子どもと共に音楽する保育者は、子どもと音楽フレームがズレないように、一人一人の子どもの音楽フレームの理解が表現を支える上で重要となる。
5. たたく活動の様な原初的な活動に対して、ペットボトルに息を吹き込み音を出す様な技術を伴う活動は、4歳幼児には継続は難しく、たたく探索行動の様な音を探る行為には至らない。

## 謝 辞

実践に協力してくれた小牧市立幼稚園のおともだちと先生方に感謝致します。

## 引用・参考文献

- 1) 井口太「カール・オルフの音楽教育理念の適用について」日本保育学会大会研究論文集（50）pp. 536-537 1997
- 2) 香曾我部啄「幼児が“音を介した表現”を生み出す認知過程とその意義」音楽表現学 Vol. 7 pp. 41-52 2009
- 3) 今川恭子「表現を育む保育環境」保育学研究 44(2) pp. 60-70 2006
- 4) 横井志保「幼児の叩く活動に関する研究―表現を引き出す活動の流れと方法―」名古屋柳城短期大学研究紀要第32号 pp. 141-146 2010
- 5) 梅澤由紀子・横井志保「リズム表現としての両手で叩く活動の構造と援助について」愛知教育大学幼児教育研究



15 pp. 1-8 2010

- 6) 横井志保・梅澤由紀子「子どもが聴き合うたく活動—その条件と援助について—」日本保育学会大会要旨集(64)  
2011